

『死をみつめて』

先日ある坊守さんからこんなメールを頂きました。「私の周りには5人の友人がガンと戦い、その内2人が夏まで持たないと宣告されています。

何も声をかけられず、ただ見守るだけです。死は必ず誰にでも来ることは分かっていますが、心穏やかにおれません。私は何を信心として頂いてきたのでしょうか。分かったふりの自分が嫌でたまらないこの頃です」と。

このメールを頂いたとき、逆にもし自分が末期がんの立場であったら、どんな言葉を求めるであろうかと考えました。それは、励まし？ 慰め？ いや、言葉をかけられるより、私の声を聞いてほしいと願う方が大きいと思いました。それは今まで生きてきた自分の人生の喜び、怒り、不安、愚痴、死にたくないという叫び、死の恐怖など。現に私は姉が亡くなる前、励ますより、姉の言葉、叫びをずっと聞いていたことを思い出しました。

生まれたものは必ず命を終えます。そして死んだらどうなるのかということについて、不安と畏れを感じるのが人間なのです。

親鸞聖人も「後世をいのらせたまえり」と若い頃、命が終わり、死んだらどうなるのかと悩まれました。死を考える前に、今私達は本当に命を大切にすることが出来るのでしょうか。何が大切なのかと気付かされるのが、念仏者としての第一歩ではないのでしょうか。